各界からのメッセージ・寄稿・思い出・インタビュー

《1》各界からのメッセージ

早川　勝　（豊橋市長）
村松千春　（豊橋市議会第 66 代議長）
加藤正俊　（豊橋市教育長）
佐藤元彦　（社会福祉法人・豊橋市社会福祉協議会会長）
高木　繁　（豊橋市自治連合会長）
吉田典子　（豊橋子育てネットゆずり葉代表）
河合やちよ（豊橋市職員労働組合副委員長）
伊藤恵子　（豊橋おやこ劇場協議会運営委員長）

《2》交流のある民間学童保育クラブからのメッセージ
鈴木秋男（児童クラブポラン）
中島章裕（明照児童クラブ）

《3》寄稿「連協 30 年に関わった人たちの思い出」～父母、子ども、指導員、OB のみなさん

《4》インタビュー「地域社会が学童を支える」～福岡・中野どんぐりクラブを支え、共に歩んだ民生・児童委員のみなさん

交流がある民間学童保育所からのメッセージ

子どもは子どもらしく、親は親らしく

児童クラブポラン　鈴木秋男

「ここをなぎの木のクラブとして使います」。案内された所は、石巻山の麓（ふもと）に抱かれるようにして建つ旧石巻小学校の校舎であった。板張りの長い廊下、木製の机とイス。細かく仕切られた壁一面のガラス窓からは、初夏の日差しが燦々（さんさん）とふり注いでいた。古いものがどんどんと新しい物に変わってゆく70年代の半ば、そこは一時代前にタイムスリップしたような、そして、今にも子どもたちの歓声が聞こえてきそうな郷愁に満ちた場所であった。「ここで子どもたちと思いっきり遊びたい」。思えば、その時に、私の保育方針は《放課後の子どもたちが屈託なく遊べる場所にする》と決まった。

それから30年。呼称は「ポラン」と変わったが、子どもたちがすっ飛んで下校してくるような場所にしたい、という思いは一貫して変わることはなかった。

最近、我がクラブには2代目が入会してくる。私にとっては孫のような存在である。ここでの遊びは30年前とほとんど変わっていないから、親が子を迎えに来る夕刻には、親子2代で同じ遊びをする姿も見られる。何とも嬉しい光景ではあるが、過ぎ去った歳月の長さを感じる瞬間でもある。

さて、最近の子どもたちは、少し脆弱（ぜいじゃく）になったような気がするが、本質的には余り変わらない。しかし、親は変わった。一言でいえば、我が子だけしか眼中になく、その我が子に対して弱腰の親が増えたようである。子どもの気持ちを尊重することと、子どもの言いなりになることとは違う。本当に大事なことを教えるためには心を鬼にすることも必要であり、それが我が子のためにもなる。我が子の幸せだけを願っているようでは大きなものを見誤る。視野が偏狭になったり、ビシッと叱（しか）ってもくれないような親の下では子どもは不安を募らせ、かえってわがままを爆発させるものである。

「子どもは子どもらしく、親は親らしく」。そんな風にいられたらいい。

子どもと親にとっての大切な場として…

明照児童クラブ　中島章裕

豊橋に学童保育が誕生して３０年、この間に子どもたちを取り巻く環境も激変しました。その中で放課後の子どもたちが安心して生活できる居場所としての学童保育が担ってきた役割は大変大きいと思います。また、学童保育には、ただ単に怪我（けが）なく子どもを預かる場所だけでなく、現代の子どもたちが経験しにくくなった異年齢の繋（つな）がりや子ども同士の育ち合いがあります。そして、多様な子どもたちの育ち合いを受け止める指導員もいます。放課後とは、読んで字の如（ごと）し「課題から放たれる時」です。学校で頑張った分、学童保育には、様々な子どもたちの姿があります。

当児童クラブでは、保育園が運営しているので、赤ちゃんから小学３年生までの子どもたちの成長が見られます。園児のころと比べるとすべてがパワーアップした姿に感激するとともに、生意気な口をきく小学生として成長していく姿も目の当たりにします。しかし、これこそが人間として自立する成長過程だと思います。

子どもたちがありのままの自分を安心して出せるためには、環境づくりを初め、小さな変化にも気づく事が出来（でき）る指導員が必要となってきます。保護者の方も預けっぱなしにするのではなく、指導員とともに子どもの成長を一緒になって考えていく姿勢が必要です。そんな姿勢があれば、学童保育が子どもたちだけの居場所ではなく、保護者同士の大切な交流の場にもなりえます。

子育ては、手間や暇がかかり、煩わしい事もありますが、その何倍もの素晴らしい体験ができるものです。学童保育が、単に放課後の子どもたちを預かる場所だけでなく、子どもたちの成長にとって必要な場所であり、指導員や保護者同士の交流の場としても発展していくことを願っています。そのためには、それに見合う環境や適切な補助が必要なことは言うまでもありません。